

カント哲学における善悪の「抗争」モデル

森 良太(上智大学)

人間において善と悪はどのように成立するのであろうか。これは哲学史上における古来からの重要問題のひとつであり、現代にも継続されて論争されるテーマでもある。今般、本発表ではこの問題に関して、カントの道徳的文脈における行為(die Handlung)と心構え(die Gesinnung)の連関の観点からの考察を試みる。本論究の問題意識は、ある行為と心構えが同時に善あるいは悪と判定される場合に、その根拠はどのように説明され得るのか、という点に存する。またその考察の舞台には、行為と心構えの関連が如実に顕れる善悪の「抗争(der Widerstreit)」という、カントのテキストにみられる概念を据えることとする。そして発表者は、かかる「抗争」のモデルを以下のような「時間起源」と「理性起源」の二段階に分けて論じることを試みる。

第一段階として、「時間起源」からみた行為と心構えに基づく善悪の「抗争」モデルを検討する。

カントは『純粹理性批判』(1781/1787年)において「妨害や反作用」という、「時間起源」の現象のなかで実質的なマイナス値を有するものを見出している。それは、「実在性(die Realitaet)」と「否定性(die Negation)」との間のプラス・マイナスの「度合い(der Grad)」をめぐる「抗争」を呼び起こすものである。次いでこの「度合い」の時間経過上において、プラスへの「上昇(die Steigerung)の総合」が「質(die Qualitaet)」のカテゴリーの「実在性」という一定の価値として判定される。そしてかかる思考様式を引き継ぎ、『実践理性批判』(1788年)においては、「抗争」の様相が善悪という実践的観点から表現されている。それは「道徳性の原理と自分自身の幸福の原理の間の抗争」として言明される。ここでは「実在性」は「道徳性」に、また「否定性」は「自己の幸福」たる「自己愛(die Selbstliebe)」に該当する。但し同書では「道徳性と自己愛の境界はきわめて判明」であるという理由から、かかる「抗争」は正面からは扱われず、その限りで中断された。

ところがカントは『たんなる理性の限界内の宗教』(1793/94年)(以下、『宗教論』)において、善悪の「抗争」についての考察を再開する。ここでは実践的概念としての「質」と「度合い」という枠組みのなかで、心構えの問題が思量されている。「質」に関しては、「超感性的(理性的)存在者としての人間の心構えは「神聖」というプラスの善にもなり得る。しかしながら同時に身体的行為者としての人間は、時間経過上の「度合い」に関して、理性とは異種の感性的存在者でもある。彼は「時間起源」の行為者として(善と共に)悪をもなし得る者でもある。そしてその心構えは、身体的行為の感性的な不完全性と結びついた場合には、「欠陥」の悪を有することになる。かかる悪は、経験的実質としての「自己愛」であり、道徳的価値に対するマイナスの「否定性」をもつものである。しかしそうした「時間起源」の善悪の「抗争」なかでこそ、「超感性的」存在者としての人間は、善い心構えからの行為をなすことにより、「質」としての道徳的価値のプラスの善を産出するといえるのではないか。

以上のような考察を試みることで、本発表では第一段階の「時間起源」の「抗争」モデルを確立させたい。そして悪(「否定性」と「抗争」から「上昇」する行為の「度合い」のなかで、「質」として判定される善(「実在性」)の心構えを見定めようと思う。

第二段階として、「理性起源」からみた行為と心構えと、そこから生じる善悪の「抗争」モデルを構想する。

カントは『宗教論』において、あえて「道徳性と自己愛の境界」を“曖昧”にするような「理性起源」の悪の概念を登場させる。それは「根元悪(die radikale Boese)」という、道徳と同じ「理性起源」を有する悪である。この「根元悪」は先の「抗争」でみたようなマイナスの値をもつ「時間起源」の悪とは異なり、いかなる実質値ももたない「転倒(die Umkehrung)」という「性癖(der Hang)」として説明されている。すなわち感性和接する「自己愛」がマイナスの値をもつ「否定性」の悪であるのに対して、「根元悪」は悪の「傾向性が違反をそそのかすとき、それに抵抗しようと意欲しない」空虚の悪である。その悪は「時間起源」ではなく「理性起源」のものである為、「抵抗」の実質的マイナス値をもたず、ただ「転倒」の作用を行うのみである。人間は「抵抗」を意識しない「根元悪」により、道徳的な善よりも「自己愛」からの悪をほぼ“無抵抗に”優先させる「転倒」に陥ることになる。そこでは道徳性との意識的な実質的な「抵抗」=「抗争」が生じないという理由から、「道徳性と自己愛の境界」が“曖昧”になるものと推察される。

またカントは「神の子(der Sohn Gottes)」という理念を登場させる。それは「道徳性の完全な規則に適ったふるまいという理念」ともいわれ、人間の心構えの理念であると同時に、個々の行為の理念でもある。カントはこの理念を神が「天から地へ降下する(herabkommen)」ところのものとも表現している。そしてそこには神が「降下」した「理性起源」の理念に倣うことでこそ、人間は(同じ「理性起源」上の)「根元悪」との「抗争」に打ち克つことができるという思想が認められるのではないか。

上記のような推量を経て本発表では、この第二段階の「理性起源」の善悪の「抗争」モデルを定立したい。そしてここでの人間は「神の子」の理念に倣うことで、その心構えを善として確定させ得ることを論証しようとする。

さらに本発表の最終目標として、上述のふたつの「抗争」モデルを架橋する可能性を探究することにより、善悪の成立の見通しをつけることを目指す。そこでは、行為と心構えを「時間起源」と「理性起源」を跨いで価値判定させるようなはたらきが要請されることになる。本発表では、そのはたらきを「神の子」と人間との間に交わされる、理念上の「上昇」と「降下」の相互性に求めたい。おそらくカントは、人間の行為を「時間起源」の「抗争」という実践的努力の「上昇」の内にみているが、他方で「理性起源」の「抗争」における人間の善的心構えの根拠は「神の子」の「降下」に求めている。ここで人間に示される「神の子」の「降下」は、その理念に倣う人間の「上昇」と合流することになる。そして発表者は、このふたつの「抗争」の交点にみられるものは、予めカントにより意図された、神と人間との理念的な相互性であるという見通しを抱いている。

上述のような論考を入念に遂行することにより本発表では、行為と心構えの連関構造をふたつの善悪の「抗争」のせめぎ合いの内に明らかにするつもりである。そしてかかる「抗争」のなかで神と人間との理念的な交流が成功した場合には善が、また失敗した場合には悪が、それぞれ「質」的に判定されることになるであろう。また同時に、このような形で明るみに出された事態こそが、カント哲学における善悪の成立を真に告げるものであることを結論として提示してみたい。